

1、死後の自分を、生きてるうちに知る!?

この原稿執筆中に交通事故に遭遇しました。

大和高田市を自転車で行中のことです。信号もなく、人通りも少ない小さな交差点で、出会い頭に軽自動車と接触し、自転車ごと跳ね飛ばされてしまったのです。幸い軽自動車も発進してすぐのことで、スピードも出ていなかったため、お互い大事に至りませんでした。

僕はというと、手の平に擦り傷が何カ所ありますが、骨折はしていませんし頭も打っていません。右腹部に打撲の痛みがありますが、これも大したことではなさそうです。警察立ち会いの下、話し合っって人身でなく物損ということで処理してもらいました。

ところが二、三日してから、右腹部が腫れだし痛みも起こってききましたので近所の整

形外科医院へ駆け込みました。腹筋も腸も無事なようでしたが、腹腔内に、かなり水がたまっているようで、これは注射針で抜こうということになりました。結果、試験管を大きくしたようなガラス容器に十本近く血の混じった体液が採集されました。

「ようさん溜めてたなあ！ まだ五〇ccぐらい残ってるけど、これは固まりかけた血で針では抜けん。かといって切開して取るより、時間はかかるが自然に吸収されるのを待つのがええやろう。」

医師の指示で十日ほどは、腹部を締めるサポーターを着用することになりました。

やれ一安心と思いましたが、この頃になると、痛みが顕在化し、しゃがんだり腹力を入れようとすると、右の腹部に猛烈な痛みが走ります。日中はそれなりに気をつけて動いているからいいのですが、夜、眠る段になるといけません。深夜とか明け方とか、無意識に寝返りを打つとき、その痛みで目が覚めるのです。

痛みを気にし出すと眠りが浅くなり、妙に不安な気持ちに襲われます。

もう長くないのかも……。

そんなバカげた思いも、日中では一笑にふせても、夜明け前の暗闇の中では不安が

ふくらみ、死ぬということが手の届く範囲にあるように思えてしまいます。

「死」ということに思いを巡らす絶好のチャンスです。そう前向きに思っても、「死」を思うと、たとえようのない不安、耐えがたい重苦しさのなかに落ち込んでいく自分を感じるんです。そんなとき、もう時間がないことを突きつけられている気がするわけです。だからといって鬱^{うつ}を病んでいるとか、精神不安定だとか、そんな感じでもなく……おまけに腹部の痛み以外は肉体的にもいたって健康です。

一日がはじまり、仕事の中で、雑用の中で、また人との接触の中で、いつしかこの不安はフェードアウトしていくんですけど、翌朝になると、また痛みとともにフェードインしてくるんです。

ここ何日か、この繰り返しが続いています。

前章の最後のほうに紹介しました、塩川香世さんの主催する、インターネットを使つた「自分の死後を思う」という不思議な瞑想会があります。

「不思議な……」と表現したのは、瞑想というのは、普通、生きているという充実感や安らぎを感じるためにすることが多いと思うんですが、この「死後の自分を思う」

瞑想では、死後の苦しい自分と出会うというところにポイントが置かれているんです。

では、どうして死後の自分は苦しいのでしょうか？

これから先は、田池先生の受け売りになります。

田池先生は、「人間は意識だ」って言います。この場合の「意識」は、「心」や「思い」といった表層の感情から、もっと根源的なものまで指していると思います。もちろん両者は切り離すことができず、どこからが「心」で、どこからが「意識」だなんて境界がある訳ではありませんし、細かな定義づけをする気もありません。

要するに、人間の本当の姿は「意識」で、肉体は容れ物にすぎない、ということなのです。

僕たち人間の身体って、外の情報を受け取るようにできてますよね。

目で見えて、耳で聞いて、口で味わい、鼻で匂いをかき、手で触って感じる。

まさに実感できる感覚です。

意識である存在が、この肉体を持つと、その圧倒的実感を手に入れたことで、この肉体こそが自分だと思ってしまうようです。そこで、この肉体こそが、健康面でも、

経済面でも、知力の面でも優れていることが幸せにつながるんだと思っています。これって、至極、当然な話ですよネ。

そこで、肉体を維持するため、肉体を快適にするため、他者と競い、他者と争うことも辞さなくなります。金銭欲、名誉欲、独占欲、自己顕示欲……みんな肉体を自分だと思ってしまうことから起こってくる欲望であり、そこに苦しみが伴ってきます。

言葉や態度で、良い人、良い妻、良い夫、良い社員、良い経営者を繕い、あげくは他人ばかりか自分自身さえ、言葉や態度でだまし、自分の心までねじ伏せ、自分は間違っていないと、なんとか自分に言い聞かせるわけです。

おかげで表面的には取り繕えたかに見えますが、しかし、心の奥底はどうでしょう。肉体的あるうち、つまりは生きているうちは、家事や仕事、学業、活動と、苦しい心は紛らわされ表面化してきません。表面化しようとしても、押さえ込み、押し隠して生きていられるのが普通の状態です。

しかし、肉体がなくなる、つまり「死ぬ」と、そうはいかなくなってきました。自分の心だけが、クローズアップされてくるんです。

まさに死後の世界は、意識の世界への入り口です。生きている間も、私たちは、意識の世界に生きていくわけですが、物質的な世界が前面に出て気付けられないことなのです。それが死ぬことで物質的な世界は隠され、意識の世界が前面に押し出されてきます。本当なら、「死」は肉体の束縛から解放されて、本来の自分に帰れる。「入口」のはずなのですが、肉体を持つことで、様々な苦しみの種を自分の中に抱え込んでしまいます。生きているうちは、生活や環境に紛れて底に沈んでいる苦しみも、死ねば、その苦しみが目覚め化してきます。

人をうらやむ思い、人をさげすむ思い、人を呪う思い、自分の境遇を恨み、自分は正しい、自分は間違っていないと周りを責め裁く思い……自分の内面を見ることを普段からしていないと、そんな苦しみが自分の中に渦巻いていることにも気付いていません。

それが死ぬと、一気にその思いが噴き出し、飲み込まれていきます。今世ばかりか、過去に作ってきた思いまでが渦巻き、あなたを押し包んでいきます。地獄というものがあるとすると、まさに自分の心こそが地獄なわけです。死んでから行くのではなく、

死ぬことで防護壁が取り払われ、自分の作り出した苦しみの中に自らはまり込んでくだけの話です。

「どうやら「死ぬのが怖い」という思いは、転生の中で数限りなく体験してきた、この苦しい記憶にあるのではないのでしょうか。」

こう考えると、自分が体験し逃げ回ってきた不安の正体も納得できるし胸落ちするものがあります。

幼い頃感じた死への不安、長じてロケ現場で蒸発にまで追い込まれた謂れのない不安、それが「死後の自分を思う」瞑想で感じた苦しみとリンクし、そうだったのかと胸落ちせずにはおれませんでした。

そう気付いたとたん、スーッと胸のつかえがおりたように感じたものです。

ところで、苦しい思いつて、これってエネルギーなんですよネ。だから今の僕の状態って、認めたくないけれど、この苦しいエネルギーを宇宙にまき散らしている状態だと言えます。「エネルギー不滅の法則」を持ち出すまでもなく、この苦しいエネルギーって、自分が何とかしないと、勝手に無くなってくれるものではなさそうです。

田池先生は、苦しい自分に気づき、これを見つめ受け入れることで、マイナスからプラスのエネルギーに変えていくことができますと言います。でも、これって他の誰かにできるものじゃなくて、自分にしかできないとも仰っています。

自分の苦しみを癒せるのは自分しかいません。他人を頼っても無駄、教祖を頼っても無駄、神を頼っても無駄……。自分が自分の苦しみを回収するしかなさそうです。

そのために転生し、新たな肉体を持って再チャレンジするのですが、肉体を持つと、その肉体を自分だと思いつて、同じ苦しみを解消するどころか、さらに重ねていつてしまいうらしいのです。

この苦しみの連鎖から自分を救っていくには、まずは、自分の苦しい状態に気付いていかなければなりません。先ほども掲げましたように、僕たちは、すべての価値基準を五官に頼っています。他と比べて生活はどうなのか、他と比べて子どもの成績はどうなのか、他から自分はどうか見えるのか、豊かなのか貧しいのか、正しいのか間違っているのか、常に物差しは外にあります。

他人から褒められようと、貶されようと、それで自分は増えも減りもしないし、な